

伝後伏見天皇筆「あがた切」

—進子内親王と『風雅和歌集』—

羽田 聡

はじめに

今年の三月五日、朝日新聞に掲載された古筆切に関する記事には少なからぬ興味を抱いた。某大学の教授が五年ほどまえ、古典籍市場で見つけた和歌の書かれた古筆切を年代測定にかけたところ、いまからおよそ千年前の料紙であることが判明したというのだ。もちろん、和歌の表現や技法、あるいは字形など、経験則にもとづく年代観を前提としたうえで、の機器による測定であり、文化財研究の新たな方向性を示すものともいえそうである。

古筆切の研究にこのような試みがなされる背景には、基準となるべき作品が少ないという如何ともしがたい現実がある。たとえ、鑑定を生業とした古筆見たちによる極札が付属していたとしても、そこに記された筆者はほとんどが伝称の域を出ないため、年代を特定する手がかりに乏しいのである。いわば、空白の部分に科学技術が導入されたということになる。

しかし、一歩さがって考えてみれば、他分野との協業をさかんに

標榜する近年の学風にあつて、互いの成果がただの無い物ねだりに終わらないようにするには、測定にともなう誤差の範囲、たとえ微量ではあつても文化財を切り取ること、などはもう少し慎重に議論されてもよいのではないだろうか。作品の調査・研究を主体とする博物館に身を置く一人として、今後の動向に注目したい。

前置きがながくなったが、本稿でとりあげる「あがた切」とよばれる古筆切も筆者の伝称にともない、ながらく後伏見天皇（一二八八〜一三三六）の宸筆とされてきた。

一 「あがた切」について—現状と課題—

この古筆切について、本格的な検討をおこなったのは、出光美術館の別府節子である。別府は断簡三葉（後掲の切Aから切C）の紹介および内容の検討をつうじて、由来や資料としての性格、筆者の可能性を論じた。

それによると、もとは料紙二三枚を継いだ卷子であり、上杉憲章が所蔵していた昭和十二年（一九三七）一二月、重要美術品に認定

された³。五藤正一が落掌したのち、同二六年六月に分割され、五藤の住していた尾張奥町（現、愛知県一宮市か）の古名たる縣郷にちなみ、「あがた切」と命名されるにいたったという。

また、三葉の和歌、全二二首のうち、合点を付して「風」と記された一首が一七番目の勅撰和歌集である『風雅和歌集』に、伏見天皇の皇女にあたる進子内親王⁴の和歌として入集することから、記された和歌の作者はすべて同一であり、その編纂にさいして同人が詠進した私的傾向のつよい撰集資料であるとした⁵。『風雅和歌集』のうち、進子内親王の關係する撰集資料としては、後述するように「貞和百首」や「院五首歌合」などが知られているが、これらとはまったく異なる資料の存在を指摘したのである。さらに、花園天皇の七回忌にあたり作成された「法華経要文和歌懷紙」にふくまれる進子内親王の懷紙との比較から、自筆の可能性がたかく、筆者の判明することの少ない女性の筆跡として貴重であると位置づけている。

かような成果は、平成一七年（二〇〇五）一月から二月にかけて同館で開催された展覧会「平安の仮名 鎌倉の仮名―時代を映す書のかたち―」にも反映されている。出品された一幅（後掲の切B）にはつぎのような解説が付されており、目下のところ、もっとも正鵠を射たものとなろう。

進子内親王（生没年未詳）による詠草の断簡。進子内親王は後期京極派の代表的な女性歌人で、父は伏見院、母は藤原基輔女後伏見院兵衛督。やや時代の下る伏見院様の書様で、京極派の歌風の顕著な和歌が、三行を基本にした散らし書きで書かれている。本断簡は七首の断簡で、内容から題意をとると、右から

「夕雨」二首、「夕松」「雨」「山松」「山家嵐」二首と詠まれており、右から二首目の和歌に合点を掛けて「風」の字が記される。これが『風雅和歌集』一七六七番に進子内親王の和歌として入集しており、「あがた切」の和歌作者が進子であることの根拠となる。現在確認される「あがた切」の連れは七葉で、全体の規模は判明しないが、ほぼ懷紙大の大きさの料紙に、前述の書式で整々と清書され、しかも入集歌の合点のあることから、進子内親王が『風雅和歌集』のために詠進した撰集資料と考えられている。なお、進子内親王の筆跡は『花園院法華経要文和歌』の中に「進子内親王」と極められた懷紙が数葉残っており、その筆跡からも伏見院様の書を能くしたことが判る。

とりあえず、本稿に関わる範囲で別府の所論をまとめておくと、①「あがた切」は二三枚の料紙を継いだ卷子であったが分割され、現在、ツレは七葉が確認できる

②記された和歌はすべて伏見天皇の皇女である進子内親王のものである

③『風雅和歌集』の編纂にあたり、同人の詠進した私的傾向のつよい撰集資料である

④「法華経要文和歌懷紙」との比較から、自筆である可能性がたかい

となる。ながい作歌歴をもつ進子内親王、または京極派和歌の研究に新たな資料が加えられたことは大きな意味をもつ。と同時に、断簡がどのような配列であったのか、あくまで可能性の指摘にとどまった筆者の問題などはこのこされた課題ということになるか。

二 現存する「あがた切」

さて、別府によれば現在、確認できる「あがた切」は七葉とあるが、(1) 別府論文掲載分、(2) 個人蔵分、(3) 売立目録所載分とをあわせ、一〇葉がこれまで管見にはいった。つぎに本紙の翻刻、および箱書きや極札といった付随する情報をあげておく。とくに断らないかぎり、翻刻における改行は原文のとおりである。

(1) 別府論文掲載分

■切 A (所蔵不明)⁸⁾

ともし火のひかりもしめるまとのうちに

きゝもたゆまぬはるさめの

をと

そらとつる雲もいくへの春雨に

ぬれぬこゝろのなそやしほ

るゝ

ぬれてゆくつハさもいかにをもちからし

あま夜の雲にかへるかり

かね

雲になくひハりのこゑもかすかななり

すみれはなさくのへの

をちかた

月うすきかすみの空ハほのかにて

むめかゝふかきはるの夜の

まと

なミのうへに月ハかすみてなにハえや

つのくむあしハかせもそよか

す

山もとのかねのひゝきもしつミはて、

よふかき月のかけそかすめ

る

掛幅装、本紙は縦二八・七cm×横五五・三cmで、紙継ぎ目を二箇

所ふくむ。七首が記され、歌題は春雨(二首)、帰雁、雲雀、梅、

春月(二首)となる。内容は不明だが、国文学者・吉沢義則(一八

七六〜一九五四)が箱書きをしている。

■切 B (出光美術館蔵)⁹⁾

なかめわたすそともものもりにあるハとの

こゑ物すこきあめのゆふ

くれ

雲しつむたにのゝきはの雨のくれ

きゝなれぬとりのこゑもさひ

しき

なかめやる峯にかゝれるしらくもに

なかはかくるゝゆふやまのま

つ

しほりつる夕暮までの雨ハれて

雲まにうすきほしのむらくゝ

山松にかせハひゝきてふくる夜の

木すゑのそらにはしそきよ

けき

(紙継ぎ目)

(紙継ぎ目)

(風)合点あり

吹たてはなひきうこかぬ木、もなし

かせのちからそよもにしらる

る

一とをりあらしハみねにすきぬるを

しはしうけとるのきのまつか

枝

掛幅装、本紙は縦二八・四cm×横四九・六cmで、切Aと異なり紙継ぎ目はふくまない。これは前後の一首が紙継ぎ目をふくんでいたことを示しており、ほぼ一紙を基準として切断されたのであろう。よって、卷子は二三分割されたのではないかと思われる。七首が記され、歌題は兩(三首)、松(二首)、山家(二首)となる。合点を付して「風」と記された二首目は、『風雅和歌集』¹⁰卷第一六・雑歌中(二七六七番歌)に入集する。

■切C(大阪青山短期大学蔵)¹¹

あけぬれとまたかけくらきもりのしたの

つゆにのこれるむしのこ

ゑく

きりくすかへに声してふくるよの

とこすさましみあきかせそ

ふく

なれのミかうれへはたれもきりくす

まとうつ雨のあけかたき夜

に

むらくに雲もうきたつ風の夜の

木のまの月はかけもさた

めす

このま、にしはしをみハやわけてゆく

野ハらの露にあくるつきか

け

草ふかミスみあらしたるふるさとハ

月とつゆとのためにそあり

ける

おきのうへハかせもそよかすしつまりて

月しく庭のつゆふけぬ

なり

雲ハらふあらしもすめるあけかたの

まよりにしに月そかたふ

く

掛幅装、本紙は縦二八・四cm×横五四・五cmで、紙継ぎ目を二箇所なくむ。八首が記され、歌題は虫(三首)、秋月(五首)となる。外箱には、古筆本家一三代・了信(一八七七〜一九五三)による極めが付される。

(2) 個人蔵分¹²

■切D

(余白あり)

のとかなるけ色もよもにをしこめて

かすみそはるのあるしなり

ける

みわたせハ山へのとけきゆふ霞

いくへのをちにいりあひの

(「風」合点あり)

こゑ

わたのハラこきゆくふねもさゝハてぬ

浪ちかすめるはるのあけ

ほの

ひきつれてけふハねのひのかすかのに

まつきくものハうくひすの

こゑ

きえのこるゆきもわかなもむらくくに

ましりてミゆる野への色

かな

掛幅装、本紙は縦二七・六cm×横四八・七cmで、紙継ぎ目を一箇

所ふくむ。袖の余白から、この切は本来の巻首であったと推測され

る。五首が記され、歌題は初春、霞、春曙、鶯、若菜となる。合点

を付して「風」と記された一首目は、『風雅和歌集』巻第一・春歌

上（八番歌）に入集するが、第五句は「あるしなりける」ではなく、

「すがたなりける」となっている。外箱蓋の表裏には、吉沢義則が

「安加多切のよかなる」「伝後伏見天皇宸翰進子内親王御歌集切 義則

謹識（花押）」と箱書きをしているほか、二代・畠山牛庵（一六二

五）九三が寛文九年（一六六九）六月にしたためた極札が付属する。

■切E

はかなしやいまさらなにとなけくらん

もとよりすへてうかるへき世

を

いつくよりめつにはしまる心にて

時そともなくうつるおもひ

（紙継ぎ目）

（紙継ぎ目）

そ

わすられぬころにうかふむかしへを

うつしてみハや月のおもて

に

〔別筆刃〕
「點ハ風雅に入たる也」

（余白あり）

掛幅装、本紙は縦二八・二cm×横四二・二cmで、紙継ぎ目を一箇

所ふくむ。奥の余白から、この切は本来の巻末であったと推測され

る。三首が記され、歌題はとりづらいが、すべて雑歌の類であろう。

外箱蓋の表裏には、吉沢義則が「安加多切はかなしや」「伝後伏見天皇

宸翰進子内親王御歌集切 義則謹識（花押）」と箱書きをしている。

この切で注目すべきは、別筆と思われる筆跡で「點ハ風雅に入た

る也」と記されていることである。すなわち、合点を付したものは

進子内親王の和歌であることがあきらかなので、逆に「點ハ」付さ

れないものも別府の指摘どおり、同人の和歌であることが裏付けら

れたことになる。本文と比してもそれほど時代がくだるようみえ

ず、実際に『風雅和歌集』を編纂する過程で付されたものとも考え

■切F

しも雪のふらぬけさしも風ハあれて

むらくハやきくもさむけ

し

ふくるまゝにゆきハつもるや吹となき

かせハおりくまとにをとし

て

あれてふくあらしのまゝのあとなれや

むら／＼みゆる夜はのうすゆ

き

へたてつるかきねの竹の雪をれに

はれてまちかきさとのひと

村

松すきのみとりもおなししろたへに

しらむもわかぬゆきのやまの

は

をのれとそつもれる雪をハラひける

風ハそよかぬまとのくれた

け

をちこちやの山のなさけをしこめて

ひとつなかめのやとのしらゆ

き

ふりはれてあさひのかけのほふより

や、おちそむる木々のしら

ゆき

(紙継ぎ目)

掛幅装、本紙は縦二八・六cm×横五三・九cmで、紙継ぎ目を一箇

所ふくむ。八首が記され、歌題はすべて雪である。外箱蓋の表裏に

は、吉沢義則が「安加多切しも雪の」「伝後伏見天皇宸翰進子内親王

御歌集切 義則謹識(花押)」と箱書きをしている。

■切G

のきにふくあやめのかほり吹ハれて

あまくもハラふかせわたるな

(紙継ぎ目)

枝よハみなひきてミゆるわか竹の

り

露のあさけの色そす、し

き

五月雨ハしはしたえまのよひの月

のきのあまりのかけそす、

しき

雨ハれて露ふきハラふ木すゑより

(風あり)

かせにみたる、せみのもろ

こゑ

みちのへやたかきこすゑにせみなきて

す、しさをくるやまのした

風

木のしたの水をとちかきうた、ねの

枕になる、月そす、し

き

もりかぬる月はすくなき木のしたに

(風 合点あり)

夜ふかき水をとそす、し

き

掛幅装、本紙は縦二八・三cm×横四九・八cmで、紙継ぎ目を一箇

所ふくむ。七首が記され、歌題は菖蒲、納涼(三首)、五月雨、蟬

(二首)となる。「風」とのみ記された四首目は、『風雅和歌集』卷

第四・夏歌(四一八番歌)に入集する。また、合点を付して「風」

と記された七首目は、おなじく『風雅和歌集』卷第四・夏歌(四三

五番歌)に入集する。外箱蓋の表裏には、吉沢義則が「安加多切の

きにおく」伝後伏見天皇宸翰進子内親王御歌集切 義則謹識(花押)」
と箱書きをしている。

■切H

うき世とハいはさらましなさくら花

ちらてひさしきさかりなりせ

は

もろくなれや吹ともかせハみえなくに

や、ちりそむるはなのゆふか

け

あハれわかをしむころを風になさハ

花のあたりはよきてふかま

し

庭まではしハくおちこて吹わたる

あらしのすゑにはなそみたる

る

山川やおちくる水のしらあハに

またなかれよるハなそまかへ

る

やまふきのはなこそ花のうちに又

ころをうつす色にハありけ

れ

掛幅装、本紙は縦二八・三cm×横四六・〇cmで、紙継ぎ目はふくま
まない。六首が記され、歌題は惜花(三首)、落花(二首)、山吹と
なる。外箱蓋の表裏には、吉沢義則が「安加多切^{うき世とハ}」伝後伏
見天皇宸翰進子内親王御歌集切 義則謹識(花押)」と箱書きをし

ている。

(3) 売立目録所載分

■切I (挿図¹⁴)

おもひやりて我さへかなし七夕の

またこむあきをたのむわかれ

は

つくろいてさのミしけるとみしかとも

はなにうれしき庭のあき

ハき

おきをもる露のまゝなるまはき原

かせもみたさぬあさあけの

には

しかのねハをのへにすみて月ハいま

まくらのやまに入かたのか

け

木すゑにハ風のをとしてかりのなく

ゆふへの雲にあめこほるな

り

秋かせハさむくし吹てゆふつくひ

かたふくみねをこゆるかり

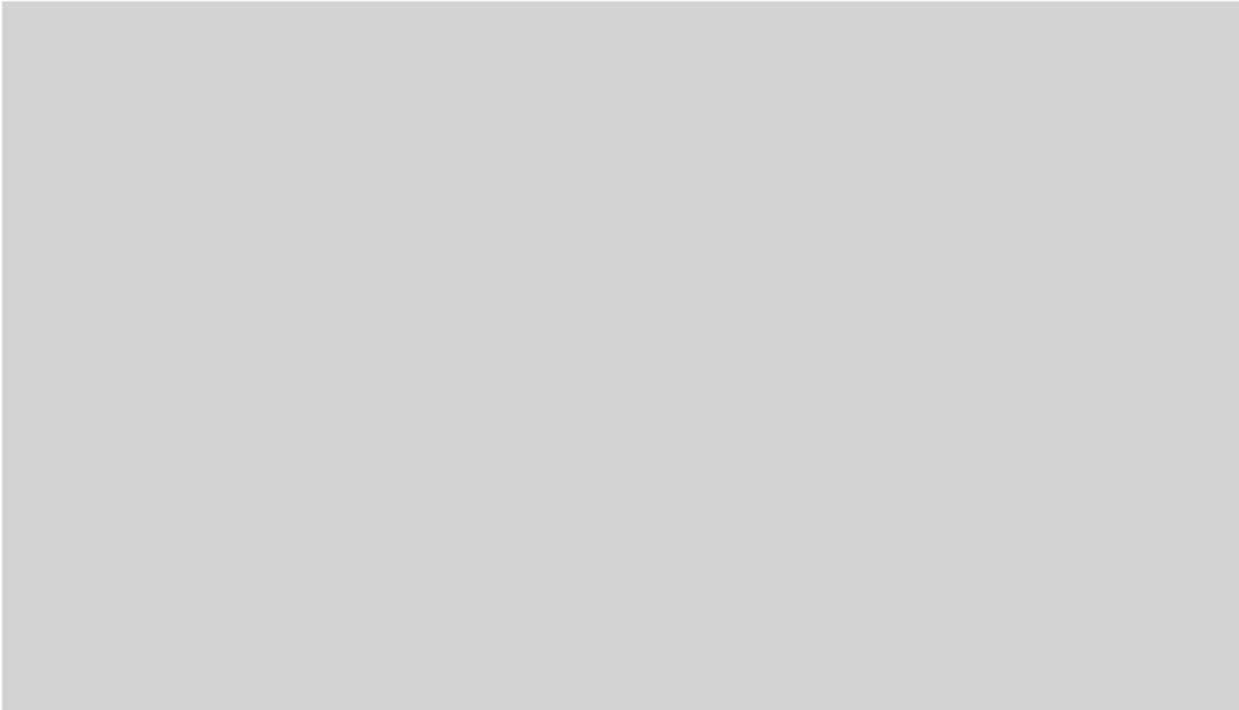
かね

ふくるまゝにくも、まよはぬ空きよみ

月よりをちをすくるかり

かね

掛幅装、本紙は縦二八cm×横四九⁽¹⁵⁾cmで、紙継ぎ目はふくま
まない。



挿図 1

七首が記され、歌題は七夕、萩、露、鹿、雁（三首）となる。外箱蓋の表裏には、吉沢義則が「安加多切おもひやりて」「伝後伏見天皇宸翰進子内親王御歌集切 義則謹識（花押）」と箱書きをしている。また、切Cとおなじく、古筆本家一三代・了信の極めが付される。

■切J（挿図2）¹⁶

月たにもまたかけのこるしの、めに

いそくもつらきひとのわかれ

ち

おもかけのとまれるとこハをきかたミ

またまとろめはゆめにみえ

つ、

とへや人うさ恋しさのいくうつひ

はてハ涙にあまるゆふへ

を

たへてすなるこ、ろをせめてうれふれと

さうとこたへぬつきそかひな

き

わひてぬるこよひみえなん思ねの

夢をハさすか人もせかし

を

つらくなる人のこ、ろやいりかぬる

ゆめさへうときよなくのと

こ

をのつからねさめハいまの時にありと

おもふこ、ろハかよひしもせ

し

いは、けにそのふしとしもあらぬうさの

心につけてみれハしら

る、

(紙継ぎ目)

掛幅装、本紙は縦二八cm×横五四cm⁽¹⁷⁾で、紙継ぎ目を一箇所ふくむ。八首が記され、歌題はとりづらいが、すべて恋歌の類であろう。外箱蓋の表裏には、吉沢義則が「安加宅切月たにも」「伝後伏見天皇宸翰進子内親王御歌集切 義則謹識(花押)」と箱書きをしている。

以上、切Aから切Jまで計六六首が確かめられた。うち、四首が『風雅和歌集』に入集する以外、ほかの勅撰和歌集にみえない点⁽¹⁸⁾からすれば、「あがた切」が同集に特化した撰集資料であることはほぼ動かないのではないか。

三 本来のすがた―『風雅和歌集』との関係から―

では、これらが本来、どのような配列であったのか。この点を考えるにあたり、一つヒントとなるのは、昭和十二年一二月に重要美術品に認定されたということである⁽¹⁹⁾。基本的に認定された作品は写真撮影がなされたようで、現在、当館にはかなりの数量の台付写真が存在し、そのなかにつきぎの一枚があった(挿図3・4)。巻首と巻末が写されており、さきの推測どおり、それぞれ切Dと切Eとに相当する。さらに、切Eのまえには、

さまざまのゆめより夢をみかさねて

しハしうつゝにさましかね

ぬる

挿図2



插图 3



插图 4

あハれさらはなかきねふりもおとろけな

ゆめはさめぬるあかつきの

かね

みちのへやしけれるもりの木の下に

色もまかはぬあけのたまか

き

という三首の存在があきらかとなり、これで計六九首が判明する。現存するならば、「あがた切」にはこの三首をふくむ一幅があることになる。

のこされた写真により、はじめとおわりは切Dと切Eに確定できたわけだが、ほかがどうであったかを検討するには、「あがた切」が撰集資料であるという性格を重視し、『風雅和歌集』との関係から考えるよりほかにないだろう。同集に入集する進子内親王の和歌は二八首あり、それぞれの歌番・所収部・詞書をあげると、

- 八 春 「おなじこころを」(●切D)
- 八五 春 「百首歌の中に」(●切D)
- 一九八 春
- 二〇五 春
- 二九四 春 (●)
- 三五七 夏
- 四一八 夏 「蝉を」(■切G)
- 四三五 夏 「夜納涼といふ事を」(■切G)
- 四八六 秋
- 七〇四 秋 「百首歌たてまつりし時、秋歌」(●)
- 七三七 冬 「題しらず」

七四七 冬

八六七 冬 「冬声といふ事を」

九九四 恋 「恋のうたの中に」

一〇二三 恋 「初逢恋の心を」(×)

一〇二六 恋

一〇五三 恋 「恋歌の中に」

一〇七四 恋 (●)

一〇八六 恋 「恋歌の中に」

一一二二 恋 (●)

一一二九 恋

一一四四 恋

一一六五 恋 「院五首歌合に、恋憂喜といふ事を」(▲)

一二三四 恋 「恋命」

一二七〇 恋 「恋歌とて」

一六三二 雑

一七〇一 雑 「雑歌の中に」

一七六七 雑 「雨を」(■切B)

となる。内訳は春部五首、夏部三首、秋部二首、冬部三首、恋部一首、雑部三首である。それはともかく、「貞和百首」(●)や「康永二年院六首歌合」(×)、あるいは「院五首歌合」(▲)といったすでに知られている撰集資料と、「あがた切」(■)とが異なることは一目瞭然であろう。

と同時に、この一覧は構成と配列についても示唆を与えてくれそうである。つまり、入集する和歌がそれぞれ雑部・春部・夏部へと配される切B・切D・切Gのうち、切Dは巻頭に位置していたこと

が確実な点、切Gにおける入集歌の配置が歌番の順と一致する点から、『風雅和歌集』の部立てと歌題のならばが大きく影響していると考えられる。これを念頭におき、各切の歌題が同集のどの歌番、および部に登場するか示すとつぎのようになる。なお、おなじ歌題が雑部にもある場合はそれも掲出した。

■切A

春雨 一〇九〜一二一(春) 一四八六(雑)

帰雁 一三四〜一三九(春) 一四八五(雑)

雲雀 一三一〜一三三(春)

梅 六三〜九〇(春) 一四四六〜一四四九(雑)

春月 一二二〜一二五(春) 一四八七〜一四八九(雑)

■切B

雨 一六八八〜一六九八(雑)

松 一七三四〜一七三六(雑)

山家 一七四二〜一七九五(雑)

■切C

虫 五五六〜五六五(秋) 一五三六〜一五三七(雑)

秋月 五九二〜六二四(秋) 一五五四〜一五八一(雑)

■切D 卷首

初春 四〜九(春) 一四一〇〜一四一四(雑)

霞 二〇〜三一(春) 一四二七〜一四三〇(雑)

春曙 四六〜六二(春) 一四三二〜一四三七(雑)

鶯 一四二〇(雑)

若菜 一二〜一九(春)

■切E 卷末

■切F 雑歌 一七九六〜二〇三九(雑)

■切G 雪 八〇八〜八六九(冬) 一六〇一〜一六〇八(雑)

菖蒲 三四四〜三四八(夏) 一五〇七(雑)

納涼 四二六〜四三七(夏)

五月雨 三五九〜三六九(夏)

蝉 四一六〜四二五(夏) 一五一七〜一五二〇(雑)

惜花 二〇九〜二一八(春)

落花 二一九〜二六〇(春)

山吹 二七二〜二八一(春)

■切I 一四九四(雑)

七夕 四六〇〜四七二(秋) 一五二九〜一五三一(雑)

萩 四七四〜四八二(秋)

露 四九八〜五〇一(秋) 一五三二〜一五三三(雑)

鹿 五一四〜五二五(秋) 一五三八〜一五四〇(雑)

雁 五二六〜五五五(秋) 一五四五〜一五四七(雑)

■切J 恋歌 九六〇〜一四〇九(恋)

さらに、『風雅和歌集』の歌番と部立てにより各切、そしてふくまれる歌題をならびかえると、

■切D 卷首

初春 四〜九(春) 一四一〇〜一四一四(雑)

若菜 一二〜一九(春)

霞 二〇〇～三一(春) 一四二七～一四三〇(雑)
鶯 四六～六二(春) 一四二〇(雑)

春曙 一四三二～一四三七(雑)

■切A

梅 六三～九〇(春) 一四四六～一四四九(雑)

春雨 一〇九～一二一(春) 一四八六(雑)

春月 一二二～一二五(春) 一四八七～一四八九(雑)

雲雀 一三一～一三三(春) 一四八五(雑)

帰雁 一三四～一三九(春) 一四八五(雑)

■切H

惜花 二〇九～二一八(春)

落花 二一九～二六〇(春)

山吹 二七二～二八一(春) 一四九四(雑)

■切G

菖蒲 三四四～三四八(夏) 一五〇七(雑)

五月雨 三五九～三六九(夏) 一五一一～一五二三(雑)

蝉 四一六～四二五(夏) 一五一七～一五二〇(雑)

納涼 四二六～四三七(夏)

■切I

七夕 四六〇～四七二(秋) 一五二九～一五三一(雑)

萩 四七四～四八二(秋) 一五三二～一五三三(雑)

露 四九八～五〇一(秋) 一五三八～一五四〇(雑)

鹿 五一四～五二五(秋) 一五四五～一五四七(雑)

■切C

雁 五二六～五五五(秋)

虫 五五六～五六五(秋) 一五三六～一五三七(雑)
秋月 五九二～六二四(秋) 一五五四～一五八一(雑)

■切F

雪 八〇八～八六九(冬) 一六〇一～一六〇八(雑)

■切J

恋歌 九六〇～一四〇九(恋)

■切B

雨 一六八八～一六九八(雑)

松 一七三四～一七三六(雑)

山家 一七四二～一七九五(雑)

■切E 卷末

雑歌 一七九六～二〇三九(雑)

という具合に、ほぼ順序よく整列させることができる。したがって、「あがた切」本来の構成は、「貞和百首」とおなじ春・夏・秋・冬・恋・雑の六部立てであったと思われる。配列はどうかというと、現状では、

春部 切D (五首) ・ 切A (七首) ・ 切H (六首)

夏部 切G (七首)

秋部 切I (七首) ・ 切C (八首)

冬部 切F (八首)

恋部 切J (八首)

雑部 切B (七首) ・ 切E (三首)

とみるのが妥当と考える。

このうち、歌番の連続性、あるいは紙継ぎ目の位置から考えて、秋部の切Iと切Cとは接続していた可能性がきわめてたかい。また、

全体の歌数は一巻を二三分割したとみられるため、切Aから切Jまで一〇葉で六六首であれば、単純に計算しても六六×二・三＝一五八と一五〇首以上はあったことになる。『風雅和歌集』の編纂過程において、頓阿は二〇〇首ほどの詠草を洞院公賢のもとへ送付したことが知られているので、ありえない話ではない。

四 筆者のこと―進子内親王の古筆切―

ここで「難しい」が、筆者の問題にもふれておきたい。まず、「あがた切」が後伏見天皇の宸筆と伝称された背景について、『看聞日記』永享一〇年（一四三八）一二月三日条には興味ぶかい記事がある。

抑自室町殿御絵二巻給、此詞伏見院宸筆云々、実否御不審、定可存知歟、見て可申之由女中より内々承、清少納言枕双子絵也、墨絵也、殊勝也、宸筆雖相似不分明、慥御筆とハ不存、源中納言同前申、若萩原殿・進子内親王御筆歟、絵も同前歟、其も不分明之間、宸筆とハ慥不拝見之由御返事申、御絵馳返進了、

このとき、伏見宮貞成親王（一三七二―一四五六）は足利義教から枕草子絵巻の詞書を鑑定するよう依頼された。伏見天皇の宸筆というが、そうもみえず、庭田重有もおなじようにいう。「萩原殿」すなわち花園天皇や進子内親王のラインも疑うが、いまいちはずきりしない。血を引く貞成親王としてはさぞかし忸怩たる思いがあったろうが、それほど彼らの筆跡は似た部分があり、見分けることは至難のわざだったのである。

では、なぜ「難しい」のか、もちろん両者の筆跡が似通っていた

こともあるのだが、そのままに進子内親王自筆の可能性を計る根拠として別府がとりあげた「法華経要文和歌懐紙」の説明をしておこう。この懐紙は文和三年（一三五四）十一月、花園天皇の七回忌にあたり、光厳天皇や尊円親王など、ゆかりの人々が和歌を詠進し、紙背に法華経を摺写したものである。近世にはいると、多くは懐紙の面と版経の面とに相矧ぎされたうえ散逸し、懐紙は現在、学校法人立命館や妙満寺をはじめ、六〇枚程度が判明する。

問題となるのは、男性の懐紙は署名があるため筆者を特定しうるが、女性のそれは署名がなく、筆者はいずれも付属する極めによつてゐることである。⁽²⁶⁾「難しい」とした所以であり、厳密に言えばここで可能なことは筆者の特定というより、「あがた切」と「法華経要文和歌懐紙」の類似性から推定するにすぎない。

これを十分に理解したうえで話をさきにすすめると、「法華経要文和歌懐紙」のうち、進子内親王と極められた懐紙は全部で六葉ある。

●学校法人立命館分（挿図5・6）

宇土細川家の旧蔵品で、光厳天皇など一九名二三首を一巻にしたもの。昭和五二年六月、重要文化財に指定された。無署名のものには付箋で筆者が示されるほか、寛政六年（一七九四）七月の古筆本家九代・了意（一七五一―一八三四）の折紙一通、および作者不明の「法華和歌作者目録」一冊が付属する。⁽²⁷⁾

①妙法蓮華経如来寿量品

方便現涅槃 而実不滅度

むら雲にかくる、

つきよかなしく

（付箋「進子内親王」）



插图 5

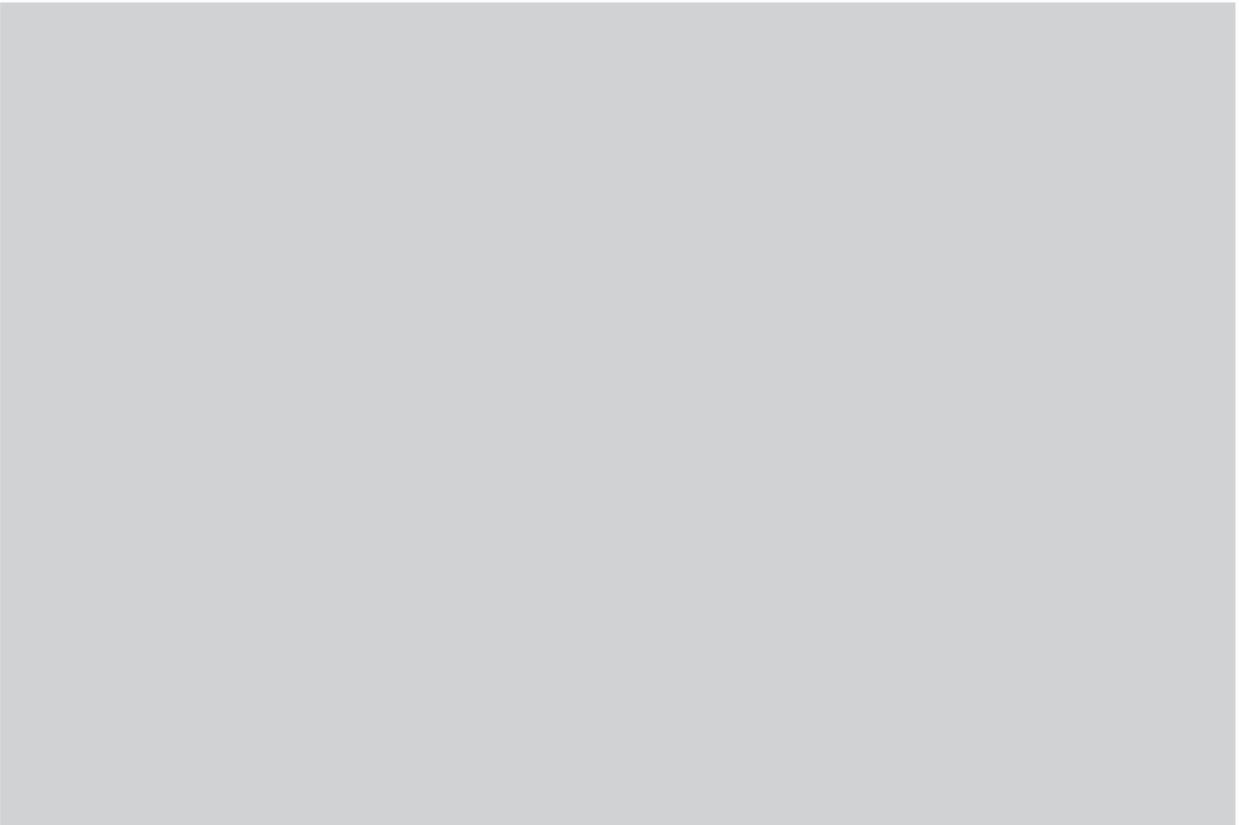


插图 6



插图 7



插图 8

も

まよひのまへに

みするなり

けり

(二八・一 cm × 三八・七 cm、三紙目)

② 妙法蓮華経随喜功德品

具満八十歳 随意之所欲

八そちまでよもに

(付箋「進子内親王」)

みてけるしなく

の

ふかきめくミも

なをそをよ

はぬ

(二八・一 cm × 三九・一 cm、一四紙目)

● 妙満寺分 (挿図 7・8)

光厳天皇など一九名二〇首を一巻にしたもので、立命館所蔵分とおなじく昭和五二年六月、重要文化財に指定された。最後の詠者のぞく極札一九葉を貼り付けた折本一帖が付属する。極札はすべて、古筆本家二代・丁栄(一六〇七〜七八)によるものである。⁽²⁸⁾

③ 妙法蓮華経属累品

如来之法勿生慳悋

おしむなとうけし

御ことのそのま、

に

ひろむるのりの

はなそうれ

しき

(二七・二 cm × 四二・〇 cm、三紙目)

④ 妙法蓮華経薬王菩薩本事品

而今焼臂身不具足

めぐりあひてまた

わかれぬるかなし

さは

身をこかしても

いか、わすれ

む

(二七・二 cm × 四六・一 cm、四紙目)

● 金沢市立中村記念美術館分

素封家・中村栄俊(一九〇八〜七八)が加賀・前田家より入手した重要文化財「手鑑」のうちに、光厳天皇など一〇名一〇首が貼り込まれる。それぞれに古筆本家による極札が付されている。⁽²⁹⁾

⑤ 妙法蓮華経提婆達多品

採薪及菓麻 随时恭敬与

たき、こりやまの

このみをもとめ

ても

のりにつかふる

身をはを

し

ます

(二八・〇 cm × 四三・〇 cm、表三〇丁目)

● 出光美術館分

古筆本家の鑑定台帳として作成されたといわれる国宝「手鑑」見ぬ世の友」のうちに、三名三首が貼り込まれる。残念ながら、和歌本文は切断されており、品名と要文のみの断簡である。いずれも、



插图 9

古筆本家一〇代・了伴（一七九〇～一八五三）の極札が付されている。⁽³⁰⁾

⑥ 妙法蓮華経妙音菩薩品 二八・一cm×五・五cm、表一九丁目

⑥は断簡であるため、①から⑤の懐紙における第一句から第三句の文字と、図版として掲出した「あがた切」から同形の文字を抜きだして比較すると、前頁のようになる（挿図9）。送筆の特徴は似た箇所が多いので、異同について即断はひかえるが、いずれの懐紙も筆者が女性であることは確実、ゆえに「あがた切」の筆者も女性を想定しうる、という論法は成り立つのではないだろうか。とするならば、進子内親王の自筆か、あるいは家女房であった春日⁽³¹⁾あたりを筆者と考えることもあながち見当ちがいでなからう。

おわりに

「あがた切」は本来、二三枚の料紙を継いだ巻子を昭和二六年六月、ほぼ一紙を基準に分割した古筆切である。戦後に切断されたという意味では、三井高弘の旧蔵品として著名な「松籟切⁽³²⁾」とつうじるものがある。しかし、後者は分割にさいして複製本が刊行されたのにたいし、前者ではそうした動きはなかったようだ。唯一、重要美術品に認定された当時、撮影したとおぼしき写真が一枚のこっている。近年、『風雅和歌集』の編纂にあたり進子内親王の詠進した撰集資料との重要な指摘がなされたが、構成や全体像は不明であり、断簡を検討する以外に方法はない。

本稿では断簡一〇葉、歌数にして六六首を紹介し、これらを『風雅和歌集』の部立てと歌題にしたがつて配列しなすことを試みた。

その結果、「あがた切」はもともと「貞和百首」とおなじ春・夏・秋・冬・恋・雑の六部立てで、全体の歌数は一五〇首以上あったと考えられる。また、「法華経要文和歌懐紙」との比較から、筆者は女性を想定することが可能で、進子内親王の自筆か、あるいは家女房であった春日あたりもその候補になりうるとした。

『風雅和歌集』の編纂にあたり、九条道教や飛鳥井雅孝から洞院公賢に送付された詠草は他筆であったことを考慮すれば、「あがた切」においても自筆か他筆かの問題は当然、生じてくるだろう。現段階ではこの点を指摘するにとどめ、今後、新たな断簡があらわれたとき、検討することを約して擱筆するとしよう。

註

- 1 ただし、極札はその時々々の価値観や作品の伝来を知るうえで有益な情報をふくんでいる。この点、木下政雄編『日本の美術八四 手鑑』（至文堂、一九七三年五月）ほか、村上翠亭・高城弘一監修『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（淡交社、二〇〇四年三月）、佐々木孝浩「江戸時代の筆跡鑑定書」（佐藤道生編『古文書の諸相』慶應義塾大学文学部、二〇〇八年七月）を参照。
- 2 別府節子「「あがた切」に関する考察」（『汲古』二五、一九九四年六月）。
- 3 『重要美術品等認定物件分類目録（書跡）』（文化財保護委員会、一九六四年九月）に「歌集 伝後伏見天皇宸翰 一卷」との記載があるのに符号する。
- 4 進子内親王の出自については、岩佐美代子「田中本帝系図をめぐる歌人達」（『改訂増補新装版 京極派歌人の研究』笠間書院、二〇〇七年一月、初出一九七一年六月）を参照。
- 5 ここでの所説は、別府節子「金剛院切」に関する一考察―十四世紀の女性歌人による百首歌の懐紙の可能性―（『出光美術館研究紀要』

- 一、一九九五年七月)にほぼ引き継がれている。
- 6 『平安の仮名 鎌倉の仮名』(財団法人出光美術館、二〇〇五年一月)。
この点、久保木秀夫「散佚歌集切集成 本文篇」(国文学研究資料館
文献資料部『調査研究報告』二三、二〇〇二年一月)を参照。
- 7 図版は註2別府論文に掲載される。なお、論文発表時は「個人蔵」と
なっていたが、『古典籍展観大入札会目録』(東京古典会、二〇〇八年
一月)に掲載される。
- 8 図版は註2別府論文ほか、註6『平安の仮名 鎌倉の仮名』に掲載さ
れる。
- 9 次田香澄・岩佐美代子編校『風雅和歌集』(三弥井書店、一九八五年
五月)、および『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編』(角川書店、一九
八三年二月)によった。ただし、歌番は後者による(以下、おなじ)。
- 10 図版は註2別府論文ほか、『大阪青山短期大学所蔵品図録』(大阪青山
短期大学、一九九二年一〇月)に掲載される。
- 11 以下、切Dから切Hは平成一八年一〇月二六日に同一所蔵者のもとで
調査をおこなった。なお、切Dは「蜂須賀家の名宝と大名美術の世界」
(徳島市立徳島城博物館、二〇〇七年七月)に図版が掲載される。
- 12 編纂の経過については、註10次田香澄・岩佐美代子編校『風雅和歌集』
ほか、鹿目俊彦『風雅和歌集の基礎的研究』(笠間書院、一九八六年
三月)、井上宗雄『改訂新版 中世歌壇史の研究 南北朝期』(明治書
院、一九八七年五月)、西野妙子『光厳院 『風雅和歌集』 親撰と動
乱の世の真白の生涯』(国文社、一九八八年九月)などを参照。
- 13 図版は『思文閣墨蹟資料目録』二九四(思文閣、一九九六年二月)
をはじめ、『古典籍下見展観大入札会目録』(東京古典会、一九九七年
一月)、『大阪古典会創立百周年記念古典籍善本展観図録 難波津』
(大阪古典会、二〇〇二年五月)に掲載される。
- 14 図版は『思文閣墨蹟資料目録』二九四によった。
法量は註14『思文閣墨蹟資料目録』二九四によった。
- 15 法量は註14『思文閣墨蹟資料目録』二九四によった。
図版は『思文閣墨蹟資料目録』三八九(思文閣、二〇〇四年一月)
ほか、『思文閣七十周年謝恩大入札会 禅林墨蹟・古典籍』(思文閣、
二〇〇八年三月)に掲載される。
- 16 法量は註16『思文閣墨蹟資料目録』三八九によった。
『新千載和歌集』に四首、『新拾遺和歌集』に五首、『新後拾遺和歌集』
- 17 法量は註16『思文閣墨蹟資料目録』三八九によった。
『新千載和歌集』に四首、『新拾遺和歌集』に五首、『新後拾遺和歌集』
- 18 法量は註16『思文閣墨蹟資料目録』三八九によった。
『新千載和歌集』に四首、『新拾遺和歌集』に五首、『新後拾遺和歌集』
- 19 一首、『新統古今和歌集』に五首が入集する。
多くの切で吉沢義則が箱書きをしており、吉沢の論考に何か言及のあ
る可能性も捨てきれない。
- 20 「春御歌の中に、「霞」とある「院御製」、すなわち花園天皇による前
歌をうけている。
- 21 これらの資料的性格については、註13鹿目俊彦『風雅和歌集の基礎的
研究』、井上宗雄『改訂新版 中世歌壇史の研究 南北朝期』などを
参照。
- 22 『園太暦』貞和二年(一三四六)四月二六日条には、「春廿首 夏十首
秋廿首 冬十首 恋廿首 雑廿首」とある。
- 23 『園太暦』貞和元年七月一日条。註13井上宗雄『改訂新版 中世歌
壇史の研究 南北朝期』を参照。
- 24 『統群書類従 補遺二 看聞御記(下)』(統群書類従完成会、一九九
一年七月)の本文を適宜、昭和九年(一九三四)に宮内省図書寮より
発行されたコロタイプにより校正した。
- 25 詳細は岩佐美代子「花園院七回忌法華経要文和歌」(『改訂新装版 京
極派和歌の研究』笠間書院、二〇〇七年二月、初出一九七九年八月)
ほか、拙稿「法華経要文和歌懐紙」の伝来と復元―立命館本を中心
として―(『アート・リサーチ』八、二〇〇八年三月)、拙稿「売立
目録と近世天皇の宸翰」(京都国立博物館編『京都御所ゆかりの至宝
―甍る宮廷文化の美―』、二〇〇九年一月)を参照。
- 26 註25拙稿「法華経要文和歌懐紙」の伝来と復元―立命館本を中心と
して―でものべたように、学校法人立命館の所蔵する「法華経要文
和歌懐紙」と、常照皇寺の所蔵する一幅、大東急記念文庫の所蔵する
重要文化財「手鑑」に捺される一葉をあわせると、本来の法華経巻第
六が復元できる。この点に鑑みれば、懐紙の配列から署名はなくとも、
ある程度は筆者の推測が可能であると考える。
- 27 図版は『藤井永観文庫所蔵 天皇の詩歌と消息―宸翰にみる書式―』
(立命館大学二世紀COEプログラム、二〇〇六年三月)ほか、註
25拙稿「法華経要文和歌懐紙」の伝来と復元―立命館本を中心とし
て―に掲載される。
- 28 いまのところ、図版が掲載されたものはない。

- 29 図版は『古筆手鑑大成 第一六卷 重文古筆手鑑（金沢市立中村記念美術館蔵）』（角川書店、一九九五年十二月）に掲載される。
- 30 図版は『出光美術館蔵品図録 書』（出光美術館、一九九二年七月）ほか、別府節子「館蔵品紹介 古筆手鑑「見努世友」」（『出光美術館報』一一六、二〇〇一年八月）に掲載される。
- 31 春日については、註25岩佐美代子「花園院七回忌法華経要文和歌」を参照。
- 32 藤原行成を伝称筆者とする「承暦元年讀岐守顯季歌合」の断簡で、昭和二六年三月に分割された。『日本名跡叢刊 陽成院一品歌合・松籟切』（二女社、一九八二年一月）、『古筆学大成 第二二卷』（講談社、一九九二年六月）を参照。
- 33 『園太曆』貞和元年七月一〇条、同年九月二八日条。註13井上宗雄『改訂新版 中世歌壇史の研究 南北朝期』を参照。